

令和4年に注意を要する病害虫

道総研	中央農業試験場	病虫部	予察診断グループ・病害虫グループ
道総研	十勝農業試験場	研究部	生産技術グループ
道総研	上川農業試験場	研究部	生産技術グループ
道総研	道南農業試験場	研究部	作物病虫グループ
道総研	北見農業試験場	研究部	生産技術グループ
道総研	花・野菜技術センター	研究部	生産技術グループ

1. 成果の概要

北海道病害虫の防除所、道総研各農業試験場および道農政部技術普及課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに試験研究で得られた結果から、令和4年に特に注意すべき病害虫について報告する。

2. 令和3年の病害虫の発生状況

令和3年は6月が高温少雨に経過したため秋まき小麦で赤さび病が多発した。ムギキモグリバエは春季の高温により発生が早まり、6～7月の高温により春まき小麦で発生がやや多かった。塊茎肥大時期が少雨傾向であったため、ばれいしょのそうか病の発生がやや多くなった。またネギアザミウマは、6～7月の高温少雨により多発し、ねぎで被害が認められた。

主要病害虫のうち、令和3年に多発となったものを表1に示した。

表1 令和3年度に発生の多かった主要病害虫

作物名	多発～やや多発した病害虫名
秋まき小麦	赤さび病
春まき小麦	ムギキモグリバエ
ばれいしょ	そうか病
ねぎ	ネギアザミウマ
だいこん	キスジトビハムシ
ブロッコリー	コナガ
りんご	腐らん病、ハマキムシ類、ハダニ類

下線は多発生となった病害虫を示す

3. 令和4年に特に注意を要する病害虫

(1) 秋まき小麦の萎縮病

本病の発生地域は徐々に拡大する傾向にある。本病の症状は縞萎縮病と似た点が多く判別が難しいが、6月中旬まで黄化症状が認められるのが本病の特徴である。縞萎縮病と同様に連作や短期輪作を避けることと適期播種が重要である。発生地域あるいは発生ほ場を拡大させないために、早期発見に努め、他の土壌病害と同様に作業機に付着した発生ほ場の土壌を他のほ場に移動させないことが重要である。

(2) 秋まき小麦の赤さび病

赤さび病は高温多照の気象条件で多発しやすく、このような気象条件となった令和3年はオホーツクの一部地域、空知及び上川地方で多発した。近年、赤さび病に対する抵抗性が“やや強”である主力品種の「きたはなみ」において発生が目立っており、抵抗性“弱”品種に準じた防除が必要な状況になっている。上位葉に発病が認められてからの防除では十分な効果が得られないため、発病が懸念されるほ場では、止葉抽出から穂ばらみ期及び開花始（赤かび病との同時防除が可能）の合計2回の薬剤散布が必要である。

(3) 春まき小麦のムギキモグリバエ

令和3年は上川地方の春まきと秋まき小麦が混在する地域を主体に、ムギキモグリバエによる春まき小麦の被害が多発した。生育初期に加害されると異常分げつを生じ、無効茎や遅れ穂が増加するため減収や品質低下をもたらす。これらは本種の被害として認識されにくいため注意が必要である。早期播種に努め、5月下旬から6葉期頃まで2～3回程度の薬剤の茎葉散布を実施する。春季が高温になると発生が早まることから1回目の薬剤防除が遅れないよう努める。

(4) 野菜類の土壌病害

令和2から3年にかけて、これまで北海道で発生していなかった野菜の土壌病害が次々と発生した。

令和2年に発生が確認されたホモブシス根腐病は、令和3年には発生地域が拡大していることが明らかとなり、道内での拡大が懸念されている。また、令和3年にはスイカ炭腐病の発生がはじめて確認された。本